

私 の 工 夫

自分の思いや考えを伝え合い、地域や世界とつながろうとする児童の育成
〜本物で必然性のある外国語活動外国語科を通して〜

総社市立新本小学校

指導教諭 平松 幸



1 はじめに

小学校では来年度から3・4年生の外国語活動、5・6年生の外国語科が始まる。その背景について、中教審答申（H28・12・21）で、「現行の学習指導要領では、文法・語彙等の知識の習得に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組が十分に行われていない」といった趣旨が述べられている。現在本校は、文部科学省の教育課程特例校の認可を受け、外国語活動・外国語科の研究に取り組んでいるが、本校の特徴である「少数集団であり、新しい発見や驚きをもってコミュニケーション活動を行うのが難しい」ことや、「地理的環境から、自分と異なる背景

をもつ人々と日常的に触れ合う機会が少ない」ことを踏まえ、今年度は、研究主題を「自分の思いや考えを伝え合い、地域や世界とつながろうとする児童の育成」、副題を「本物で必然性のある外国語活動・外国語科を通して」と設定した。ここでは、外国語活動・外国語科において、本物で必然性のある活動を生み出すために大切にしてきた授業作りの視点を、実践とともに紹介したい。

2 言語活動の工夫

1 単位時間の授業内で行われる主な五つの言語活動 ① Greeting ② Small Talk ③ Activity ④ 中間交流 ⑤ Comment Time を見直し、定型文を覚えて唱えるだけの活動

や、ゲームを楽しむむだけの活動にならないようにした。以下は、③ Activity と④ 中間交流における内容である。

(1) 第3学年 「What do you like?何が好き」のActivity

まず、歌やチャンツ（英単語や英文をリズムに乗せて発音すること）で “What do you like?” “I like ~” の表現に慣れ親しみ、その後歌詞の一部分に自分の好きな物や尋ねたい質問を当てはめて歌うようにした。そして、好きなものを聞き合うやり取りに十分慣れ親しむことができた



Activity におけるインタビューの様子

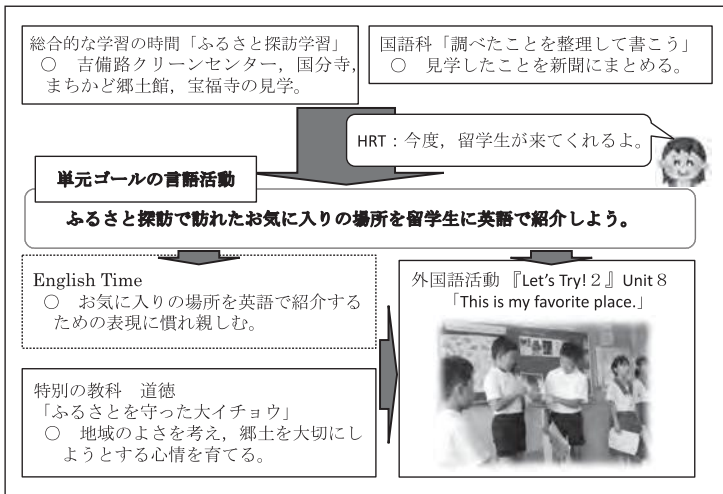
ところで、校内の教職員に好きなものをインタビューするという言語活動を取り入れた。そうすることで児童は、「こんなことが聞きたい」という自分の思いをもってインタビューをすることができた。

(2) 第6学年 「This is ME! 修学旅行でコミュニケーションしよう」での中間交流

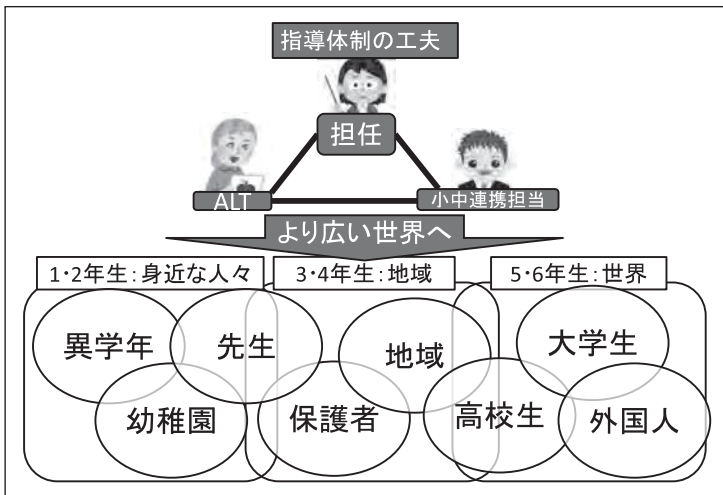
修学旅行でのインタビューを想定して友達とやり取りを行う Activity の後で、活動中に困ったことや言いたかったけど言えなかった英語表現を伝え合う中間交流を行った。そこでの「外国の方に岡山の場所を伝えたいけど、表現が分からない」という児童の思いに対して、教員が、広島なら外国の方にも分かりやすいことや5年生のときに使った表現が使えそうなことを伝えると、“Between Kyoto and Hiroshima.” という表現に気付くことができた。中間交流を設定することで、児童は、自分の思いや考えを表現するための英語表現を獲得することができ、さらにそれを学級全体に広げることができた。

3 単元構成の工夫

担任が外国語活動・外国語科を担当するよさの一つが、児童の実態に合わせて授業を考え、作り、他の教育活動と組み合わせることができることである。担任は、新しい外国語活動・外国語科の単元に入る前に、学びのつながりができそうな他教科や行事をイメージし、児童と一緒に、児童の願いに沿った単元ゴールとなる言語活動



資料1 第4学年「This is my favorite place. ～ふるさと総社を紹介しよう～」単元構成



資料2 より広い世界に目を向けるための人との関わり

毎時間行う児童の振り返りシートから資料3のようなコメントが見られた。

言語活動の工夫により、自分の思いを伝え合う楽しさを感じている姿、単元構成の工夫により、単元ゴールに向かって学ぶ達成感を味わう姿、より広い世界に目を向けるための人との関わりにより、英語でやり取りをする喜びや有用

性を見出し、さらに多くの人と関わっていかうとする姿が見られた。5・6年生での「読むこと」「書くこと」の指導や評価の在り方については、今後も研究を深める必要があり、こうした成果と課題を踏まえ、「英語が好き」で自分から様々な人や新しい世界とつながろうとする児童の育成を目指して、外国語活動・外国語科の授業を実践していきたい。

4 より広い世界に目を向けるための人との関わり

友達や担任、ALT（外国語指導助手）らと十分に自分の思

を設定した。そうすることで、毎時間の言語活動に必然性が生じ、児童は目的をもって主体的に活動することができた。資料1は、第4学年における単元構成の工夫の実践例である。

5 おわりに

いや考えを伝え合うことができた児童は、「もつと話したい」という願いをもつ。その願いをもとに、様々な人々と英語によるコミュニケーションができる場を設定した。そうすることで、児童は、伝わる喜びや達成感を味わうとともに、関わった相手に興味をもち、自分の世界を広げていくことができた。

- ・今日、学校の先生と、ほかの先生にもインタビューをして、好きなものと同じだったりちがったりして楽しかったです。（3年）
【好きな物をインタビューする言語活動を通して】
- ・最初はゆっくりじゃないと言えなかったけど、今はスラスラ言えるようになった。英語のことを急にふられてもすぐに言えるようになった。外国の人と会って英語が言えるようになった。（5年）
【留学生に日本文化を伝える単元構成を通して】
- ・英語を学んだことで、初めて会った外国人とふれ合うことができうれしかったです。これからも、この英語を使って、世界の人とふれ合いたいです。（6年）
【外国人観光客との関わりを通して】

資料3 児童の振り返りから